

俳句における美意識について

On A Sense of Beauty in Haiku

新田義彦

Yoshihiko Nitta

日本大学経済学部/ALR(言語研究アソシエーション)

Nihon University, College of Economics/ALR(Association for Language Research)

nitta.yoshihiko@nihon-u.ac.jp

概要

俳句における「切れ」つまり「語り」の流れの意図的中断というレトリックに焦点を絞って、句作者が句中に埋め込んだ「美意識」を発掘する努力をした。取り上げた句は、芭蕉、千代女、子規などの古典句、および濃厚な感性の筆致を持つ西東三鬼、真鍋呉夫、藤沢周平、大道寺将司などの現代句である。努力の結果得られた知見の断片を披瀝したが、2019年9月の第36回認知科学会オーガナイズド・セッション「日本の物語論と美を感じる心」の議論に資することができれば幸いである。

キーワード: 俳句, 美意識, 切れ, 切れ字, 和歌, 連歌, 発句, 格調, 完結性と独立性

体を語り尽くす余裕(能力)がない。物語は必然的に当該の俳句の外に置かれることになる。つまり俳句の語る物語は、必然的に読者の想像力による補完に依存することとなる。

俳句はその成り立ちからして、完結性の欠如した不完全な語り(narratological object)であると言えるが、当該の俳句と外置された物語との間の境界(あるいはインターフェース)の部分。先述述べた「俳句外の切れ」である。

このような俳句の文構造上の不完全性、俳句外の切れを経由する曖昧な語り(ほのめかし)こそが、俳句の美質の本質であると筆者は主張する。

本論考においてはこの主張の補強(証明はどれも難しいので)、具体的俳句の解釈の積み上げによって実行してみたい。

1. はじめに

俳句の美を語るときには、「切れ」についてまず語らねばならない。

俳句の「切れ」あるいは「切れ字」について語る多くの識者は、俳句の内部の切れあるいは切れ字をもつばら取り上げる。しかし、5-7-5文字(あるいは音)の外部にある「切れ」の方が、俳句の美と深く関わることをまず主張したい。

俳句には2種類の切れ、つまり俳句内の切れと俳句外の切れがあるという考え方は、仁平勝(2009)が明晰に論じている。

俳句は5-7-5-7-7文字の和歌から、その前半部分を独立させて仕立て上げた文芸文であったことを思いささねばならない。

文芸文の味わいは、それが示唆する「物語」にあると言ってよい。前半部分の切り出しによって誕生した俳句には、当然のことながら、物語の全

2. 俳句における「切れ」

俳句における「切れ」とそこから生じる「美」について論ずることが本論文の目的である。切れの定訳(英訳)については不知であるが、一応 gap としてよいように思う。意味的な連続性が断ち切られて、その前後に間隙(いわゆる gap)が生じるからである。以下の本文で詳細に見ていくが、切れ(gap)には様々な様態が有り得る。鋭い瞬断からゆるやかに付加される句切れのようなものなど多様に分布する。ほとんど切れ目のない、連続した言葉の並びからなる俳句もある。

切れは、俳句の内部に生じると一般に考えられている。特に上五の次に出現するもの、特に「や」などの特別の助詞、助動詞の命令形・終止形を従えて出現するものが古来多くの研究書で取り上げられている。

本論文では、当該の俳句の文字列の外部、あるいは俳句の末尾に生じる切れを取り上げ、これが俳句に独特の「美」を齎す原動力であることをあれこれ論じてみたい。

句末に切れを齎（もたら）すきっかけ（trigger）は、句内の切れ、特に上五の切れに多く存することを[仁平 勝（2009）]は、芭蕉の俳論を引用しながら精緻簡潔雄弁に論じている。ここでは氏の言説の要約は諦め、有益な示唆を得ただけ言っておく。以下は我流の「切れ」論である。

- (1) まず1つの俳句は、何らかの物語（narratological object）を担っていると見なす。俳句はこの物語を語り尽くす（つまり、完結した物語を述べる）わけでは勿論ない。
- (2) 多くの場合、上五で「語り」は一旦中断され、後続する中七と下五に引き渡される。下五の末尾つまり句末での切れは、上五の切れのおかげでやりやりやすくなる。
- (3) 通俗的な要約をすると

上五（提題）＋中七・下五（叙述・語り
継ぎ）

という構造が自然に導入される。

ここで議論を少し横にずらして、「発句の完結性と独立性」について述べておかねばならない。発句は俳句の原型である。あるいは、ときに俳句イコール発句と考えてよい場合も多い。発句は、百句あるいは三十六句からなる連歌の先頭にあつて全体を束ねつつ先陣を切る五七五の句である。

「俳句」は、明治中期、正岡子規による俳諧

革新運動ののちに広まり定着した呼称である。

「発句」は連歌の全体を束ねるのであるから、それなりの格式・格調が求められるが、形式的（あるいは統語的）には「言い切り」による、他の後続句からの独立性を求められた。言い切りには「かな（哉）」「けり」などの切れ字を用いることが多かった。体言（名詞）「物の名風情」は切りにくいという古人の言もある。連歌において発句は何としても他の句達から独立して切り出されていなければならない。句末の「かな」「けり」「らん」などの特殊な助辞は必ずその後ろで切れていなければならない。格調の保持には言葉使い方などの意味的側面もあるが、読者の解釈の仕方に左右されることのない、普遍的な格調が理想的である。そのために句末の切れ（きっぱりした言い切り表現）、季語の配置、などの統語論的装置が用意されている。

発句に格調（完結性と独立性）を持ち込むための装置である切れ字について、少し述べておく。川本皓嗣（2009）の「切字の詩学」p. 32 切字十八種を引用する。

助詞＝かな、もかな（もがな）か、よ、そ（ぞ）、や
助動詞＝けり、らむ（らん）、す（ず）、ぬ、つ、じ
形容詞終止形の語尾＝し（青し）
動詞命令形の語尾＝せ（尽くせ）、れ（氷れ）、へ（散りそへ）、け（吹け）
疑問の副詞の語尾＝に（いかに）

また川本皓嗣（2009）は、切れ字は必ずしも句末に来るわけでもなく、また句の語りの流れを切らない例もあることを指摘している。まことにあって俳句あるいは発句の「切れ字」は、扱いにくい鶴のような代物である。

本論文では、切れ字を持たぬ平句、切れ字を必要としない句も俳句として取り上げる。また「切れ」は形式的・統語的体裁を整えていなくてもよい。語りの流れを中断・切断するものはすべて「切れ」として扱う、という立場を取る。つまり「切れ」は、統語的様態ではなく意味的様態であるとする。

話を戻す。「上五（提題）＋中七・下五（叙述・語り継ぎ）」の典型例を挙げよう。

i) 閑さや岩にしみ入る蝉の声 松尾芭蕉
元禄2年5月27日（太陽暦では1689年7月13日）の作

ii) 夏草や兵どもが夢の跡 松尾芭蕉
奥の細道の旅（元禄2年3月27日～9月6日）の途中、奥州平泉で詠んだ句。奥州藤原氏の栄華の跡。虚無の美。

iii) あさがおにつるべ取られてもらい水
加賀千代女

iv) あさがおやつるべ取られてもらい水
加賀千代女

註：後に（35歳のとき）iii)を改作してiv)に治定した。

v) 月も見て我はこの世をかしく哉
註：千代女の辞世の句。「かしく」は「かしこ」と同義、女性の手紙の結語。「さようなら」という意味。

千代女の句として人口に膾炙しているが、実は千代女の句ではない句を2つ取り上げる。

vi) 起きてみつ寝てみつ蚊帳の広さかな

vii) 蜻蛉釣り今日は何処まで行ったやら
註：千代女が結婚経験を持つのか否か不明、したがって子をなしたかどうか不明。このような知見と重ねるとvii)の句は興味深い。つまり子供を持った経験がないのならば、蜻蛉釣りの句が千代女の句である可能性は随分と低くなる。

註：注釈の知見をまとめるにあたって、Wikipediaの記述および章末与えた芭蕉および千代女の句の解説本を参考にした。

句の外にある、つまり句末の切れに続く「語り」について考察する。

i) 静寂の佇まいは蝉の鳴き声さえも岩に吸収してしまう。蝉の声が反って静寂を強調している。このような状況の中に身を置いたならば、普段喧騒に囲まれて生活することを余儀なくされている我々現代人はどのような感懐を持つであろうか？このような開かれた問いかけが、句外に継続する「語り」であると筆者は考える。そしてこの静かな問いかけが「美」の本態であろうと筆者は思う。

ii) 滅び去った古の兵達の跡に残った生い茂る

夏草を見て、人が感じる何か、単に「無常観」として一派からげに論じることはできない何か。そこに「語りかけ」の美があうように思う。

iii) あさがおに・・・と詠むと、これはこれで素直な夏の生活感の歌い上げで悪くはないのであるが、全体がさらりと流れてしまって、単純な語りをする平句に陥る危険性がある。あさがおや・・・のように、上五を明確に切ることにより、後続する語りが、斬新さ、微笑ましさ、生き物に対する愛情などの輝きを増すことになる。句外にある物語は、優しい心を持ちつつ日々をつましく生きる千代女の姿ということになるのか。

v) 美しい月も堪能した、と満足してこの世に暇を告げることができる千代女は、凡人の真似することができない諦観（悟り）の境地に達していると言えよう。「哉」の一文字で後続する思い（未練）をスバリと断ち切っているが、強靱な意志に裏付けられた強い「美意識」の存在を感じる。

vi) やや平凡な生活句の感じがする。遊女が詠んだという説が正しいとすれば、なにやら怠惰で艶めかしい空気が蚊帳の中に漂っているような気がして来て不思議である。後続する物語は言うまでもなく、・・・（言及御免）。

vii) 蜻蛉釣りの句。千代女の句である／なしにかかわらず、腕白な子供を思う母親の心情が素直に詠み込まれた句であると思う。句外の「語り」は子育てに忙しい平凡な主婦の生活空間であると言えようか。

3. 切れの美学

飛躍の大きい比喩を用いる。俳句の美には切り花（生け花）の美と共通するものが多い。花は木について開いていても、また球根から茎を經由して開花していても美しいが、切り取られて花瓶に活けられ、あるいは花器に挿されていても美しい。切り花の美は何処を切るか、どのように切った断片を配置するか左右される。この辺りの状況は句作における語句の配置と共通するところが多いように思う。また花を見て感じる「美」は、その花単独で孤立（閉鎖）しているのではなく、もとの原野や花畑に思念を

飛ばして獲得されるものも多い。このあたりも、俳句とその句外の「語り」と類似するように思う。

4. 「切れ」のない俳句

「切れ」が無いからと言って、俳句の美が消滅するわけではない。特に現代俳句においては、斬新な驚きや意外性を重視して、まどろっこしい「切れ」によるもたつきを嫌って、主張や観察・感懐をすらりとひと思いに詠みきる句もある。これにはこれの「美」がある。

仁平勝（2009）p. 22からの孫引きであるが、高浜虚子の句集「五百句」および「五百五十句」から拾ってみる。

鎌倉を驚かしたる余寒あり
天の川のもとに天智天皇と虚子と
どかと解く夏帯に句を書けとこそ
白牡丹といふといへども紅ほのか
酌婦来る点取虫より汚きが

（以上 五百句より）

げてもものは嫌ひで飛驒の秋は好き
歌留多とる皆美しく負けまじく
焚火してくれる情に当たりもし
梅雨傘さげて丸ビル通り抜け
崖ぞひの暗き小部屋が涼しくて

虚子は日記を書くように俳句を作ることを考え、これを「句日記」と呼んでいたほどだから、切れのない平句も量産した。仁平勝（2009）は、最初の句はどう考えても「鎌倉を驚かしたる余寒哉」のように句末の切れ字を詠えることが自然であるから、虚子は意図的に「哉」を忌避したのであろうと、言っている。つまり虚子の平句志向（あるいは嗜好）の表れと言えるかもしれない。

5. 「切れ」と「語り」の種々相

句外にある物語をSと記す。

- (1) 平凡な日常生活と謙虚な諦観（人生への諦め）を楚々たる美として語る句

鈴木真理子『遠花火（2000）』から

- ・今生の刹那を生きて遠花火

F: ほんの一刹那、この世を生きてきて今遠花火を眺めている。

O: この世、一瞬、人生、遠景、花火、無常、疲れ

S: ぱっと咲いてさっと散る花火を遠くから見てみると、自身の人生行路も刹那に展開して終了する遠花火に似ていると思う。

- ・六月の海の碧さや石廊崎

S: 六月の石廊崎は海の碧さが美しい。

- ・冬めきし山の湯けぶり裸婦二人

S: 冬山の露天風呂に女性が二人湯浴みする。

- ・秋立ちぬ道標古りし沼の跡

S: 立秋の今日、古い思い出のある道標の立
あさか
つ安積沼の跡地を訪れた。

- ・鱻干のひらひらいかに罪深き

S: 干し鱻が吊るされてひらひら風に舞っているが、鱻にだって生命と生活があったはずだ。それを無造作に焼いてパクパク食う我ら人間は何と罪深いことか。

- ・赤い羽根胸に虚実の人の海

S: 赤い羽根を胸につけてぞろぞろ歩く勤め人達。彼らは虚実が混交した現世を歩いているのだ。[何故かゾンビの群れを連想する]

- ・来世にもほうずき赤くなるばかり

S: あの世でもほうずき（鬼灯）は赤い実をつけるのだろうか。そうならば口に入れて鳴らして遊んでみようか。それとも鎮咳・利尿剤として使うべきか。

- ・子に乳房与えし記憶夜を寒よるみ

S: 今は老婆となってしまったこの私も、昔は若く子供に乳房を吸わせていた。そのような記憶が寒夜にふと蘇ることがある。

鈴木真理子『渡る橋（2008）』から

- ・本物の悪には遠し冷奴^{わる}

F: 冷奴はとても本物の悪（健康を害する食品）とは言えない。こんなに美味しいのだから。

O: 冷奴，美味なる食品，家庭用医学書の堅苦しい教え，蘆川桂洲著の『食用簡便』（1687）
I: 食用簡便（1687）には，生の豆腐を[番椒（ほうらい）の粉を加えた醤油に浸して]食う冷奴は甚だ[健康に]悪い。食うな，とあるが，悪いなんてとんでもない。こんなに美味しいものはどんどん食べなければならない。九州大学付属図書館の貴重書コレクション所蔵）によると，『食用簡便』（蘆川桂洲著，貞享4（1687）年序刊）は，食物の医学的効能とその調理法を記したものである。と述べている。当時，家庭医学書の役目を果たしていたものと推測できる。

- ・蟬落ちてひっくり返る世を見たり

S: 蟬の死骸が落ちてひっくり返っている。蟬は実は，何もかもがさかしまな現世を，ひっくり返ることで逆転補正して観照しているのかもしれない。

- ・生涯を浮世の風に十三夜

F: 生涯を浮世の風に流されながら過ごし，今十三夜の月見をしている。

O: 浮世，生涯，人生，無為，無常，諦念，十三夜，月見，虚無感，寂寥感

I: 十三夜の月見をしながらふと思った。わが生涯は浮世の風に漂ってふわふわと，この無邪気な名月のように無為に過ぎ去ってしまったなあ。

- ・焼きさんま静かに冷えて生き難し

S: 焼いた秋刀魚が皿の上で静かに冷えている。秋刀魚よ，お前の生涯は生きづらいものだったのだろうか。こうして食われもせずに焼き冷ましの憂き目に会っているのだから。実はこの私の生涯もあんに似ているんだよ。

- ・メールパソコンみんな駄目でも酸素は鳴らせるの

やや難解 字余りに託した思いの強さ

S: メールもパソコンも，みんな難しくて使

えないけれど，酸素吸入要請のナースコールボタンは押せる。

- ・秋風や洗いざらしの年重ね

- ・秋の陽をたっぷり入れて柩^{かん}の窓

S: 旅立するあの人の柩の窓を開けて，最後の秋の陽射しをたっぷり入れてあげましょう。さようなら。

- ・葦枯れて人も枯れゆくみをつくし

S: 懐かしき思い出の沼に立つ標識杭（みおつくし）よ。その周辺の葦も枯れて辺りは見通しが効くようになったが，この私も葦のように枯れてしまった。もはや杭の世話になることもないだろう。

(2) 恋愛感情や異性への憧憬における美学を罪悪感の色づけにより語る句

*おそるべき君等の乳房夏来（きた）る
西東三鬼

shocking to see/your glamorous breasts--
--/summer has come

t

*花冷えのちがふ乳房に逢ひにゆく 眞鍋呉夫

S: 花冷え（桜が咲いたが寒い）の頃，私は別の女に逢いにゆく

*密会の窓より高し梅雨の駅。 眞鍋呉夫

S: 私は女と密会している。宿泊しているホテルの) 窓よりも駅が高いところにある

なぜ駅の高さが気になるのか?

(3) 病氣と死への怖れを素直に語る句，素朴な美観が自然に随伴する。

藤沢周平氏の俳句：『藤沢周平句集（1999）』から

*軒を出て犬寒月に照らされる

S: 藤沢氏は，犬の振る舞いを客観的に観察しているのではない。孤独の匂いを纏いながら歩く犬の姿に己を仮託し何かを語っているのである。

*桐の花踏み葬列が通るなり

S: 葬列の中心にある棺の中に己を仮置して強い虚無の空間について語っているようである。

* 死火山の朱の山肌冬日照る

S: 「死火山」という自然物の中に「死の予感」という語りを埋め込んでいる。

* 風出でて雨後の若葉の照りに照る

S: 失礼な言い方ではあるが、凡庸な句として片づけられそうになるが、作者の抱える「死の予感」「人生の虚無感」に思いを致すと、重い語りであることが分かる。若々しい生命感・躍動感の裏側には、死の虚無感が存在するのだと語っている。

5) 聖書借り来し畑道や春の虹

S: 聖書を借りてくる作者の姿に、死と虚無の語りを読み取るのは深読みであろうか。

(4) 絶望の極限にある美, 荒涼の美を語る句

* 棺一基四顧茫々と霞みけり

S 刑死者が納められた棺が一基ポツンと置いてあり、その四囲が茫々と霞んでいる。

* 鬼を呑む夕べ哀しき曼珠沙華

S: 鬼を呑み込んだような妖気を孕む夕べに、曼珠沙華が哀しげに咲いている。

* 縮みゆく残(のこん)の月の明日知らず

S: 徐々に小さく縮んでいく残月は、明日の運命すら分からぬ己の化身のようだ。

* 年経てもなほ生きぬかん寒の獄 1997年

S: すっかり老人となってしまったが、私はこの寒い獄舎で生きてゆかねばならぬ。

* 狼や見果てぬ夢を追い続け 2000年

S: 狼よ、お前は見果てぬ夢をいつまでも追いつけているのか。この私もそうだが。

こそことし
* 去年今年風の過ぎ行く音ばかり 2004年

S: 去年も今年もこの獄舎には吹きすぎる風の音がするばかり。

* 八州の闇の深さやいなびかり 2005年

S: この日本の国の政治の闇は何と深いことだろう。稲光がやたらと目立ってしまう。

* 胸底は海のとどろやあらえみし 2011年

S: 私の胸底には上代の朝廷に反逆した荒蝦夷(あらえみし)の怒りが渦巻き、海のとどろのような音を出している。

* 死の覚悟求めて止まず花の雨 2014年

S: 私は常日頃から刑死の覚悟を心掛けているが、その精神は無心に咲く花に降りかかる無

常(あるいは無情)の雨のようだ。花は、それでもなお生き続けたいと願う正直な心の象徴と解釈したい。

O: 「棺」「鬼」「夕べ」「闇」「稲光」「怒り」「政治における矛盾と悪」「曼珠沙華」「残月」「明日が分からぬ運命」「老い」「獄舎」「冬」「死」「覚悟」「花の雨」…… 慙愧と絶望の融合する極限の物語というべきか。若い大道寺氏を極端な反社会的行動に走らせた政治の闇への消えぬ怒りと、理想を果たせなかった後悔の念がしぶとく詠みこまれていることに驚かされる。氏の情熱と行動が社会の許容する範疇に収まるものであったならば……といつしか考えてしまう。事件の被害者、犠牲者の遺族の方々は到底認めてくれぬ仮定ではあるが、芸術という相当に懐の広い領域にすら入れてもらえぬ、極北領域の語りが形成されていると言えるかもしれない。

Iの総括: 風雅、超然、余裕などの古典的俳句の特質とは無縁の、極北に位置する句である。極限の荒涼の美を持つ語りが幽鬼のごとく随伴する。作者が若い時代に起こした非社会的事件を知れば、基底にある重い諦念のメッセージに辿り着くかもしれない。

6. 切字と埋字

「切字」と書いたがこれは修辭学的(見てくれ)の理由であり、本来的に「切れ」と書くべき代物である。

俳句の語りの流れには、どこかしらに「切れ」、つまり流れの中断があることをこれまであれこれ論じてきた。この切れの直前あるいは直後の語を意図的に隠して(消去して)しまった俳句が、「埋め字俳句」である。埋め字の部分で補完することにより、所与の俳句の変形判(variation)が作れる。バリエーションの観察により所与の俳句のオリジナルの美について考えることが本章の目的である。

繰り返しになるが、「埋字」とは一部の語句を省略した穴あき文形式の俳句のこと、あるいは穴あき部分に語句を埋め込ませることである。高浜虚子は、埋字の課題を初心者に課して作句の訓練をすべきと説いている。また埋字の課題

の解き方を見ればその人の俳句の技量が図れるとも説いている。(高浜虚子：俳句の作りよう、角川ソフィア文庫(2009))

本報告では、埋字を「穴あき俳句」という意味で使うことにする。また、埋め字の課題を提示することにより、当該俳句の美質や句作者の美意識を探る便とすることができる、というのが筆者の主張である。

所与の俳句を、埋字にすることは、俳句の汎化であると見なせる。特定の語句を自由度の高い変数Xに置き換えることであるからである、本報告では穴あき語句を変数 XやYで表現することにする。

高浜虚子(2009) p. 59から「埋字」に関する記述が始まっている。その冒頭の文は、次のように述べている。

かりそめにも俳句を作る以上は古人のやらなかった境地に足を踏み入れなければだめだ、とこういう議論に私は反対いたしません。けれどもそれは初めただ一生懸命やっているうちに、自分も予測しなかったほど心眼が明らかになってきて、今までほとんど意識せずにやってきたことがすでに古人の範疇を脱して、一境地をひらいておったというようなのがいいのでありまして、鈍根はいくらやるつもりでかかっても何もできないで終わるのであります。新しい早く一機軸を出そうなどとしてあせることや、強いて人目に立つような新しい試みをしようとしたりすることが、決して本当の新境地をひらくゆえんではありません。急がず騒がずを歩いてゆく心が肝要であります。・・・だと申してまた、弛緩した心でいて、俳句は古くてもいいのだ、どうでも十七字さえ並べておれば進歩しなくてもいいのだというような暢気過ぎた心持でいても困ったものであります。そういう心持でいては古人のやらなかった境地に足を踏み入れるどころか、とても句に興味を見出すことすらできないだろうと思います。・・・奇怪な句を作るようなことはせずに、おもむろに、確実に、その人相応の力をこめて、沈着な心持で、急がず騒がず勉強をすることをすすめ

るのであります。清新な句をもとめずともできます。ゆめゆめ近道をしようとして荆棘(けいきょく)にひっかかることをしてはなりません。私が卑近な平易な句作法をお話したことは、晦渋な迂遠な俳論をして諸君を一夜作りの大家にするよりも、諸君の良友をもって自ら任じておるゆえんだと考えるのであります。
<引用終わり>

★★正岡子規(1867-1902)が高浜虚子(1874-1959)に出した埋字課題。

♥ 鍋提げて XYZ

虚子の解答：

鍋ながら座敷に御馳走を持っていく、鍋を洗い裏の井戸端に行く、・・・う一む句にならぬ。ふと見た前方に女が2、3人泥の中に足を突っ込んで田螺(たにし)を掘っているような光景。そこで

♥ 鍋提げて田螺掘るなり町外れ

子規が示した句の例

♥ 鍋提げて淀の小橋を雪の人

「鍋提げて」というちょっと尋常ではないはじめの5文字があるので、後半12文字のややもすれば平凡陳腐な写生句が引き立たされて(救われて)いる。

新奇性は、「鍋提げて」が与えている。高浜虚子(2009)が取り上げたやや大量の埋字の例題を以下に示す。

皆さんはどのような埋字解答をしますか？ちょっとやってみてください。

♥ 1 大蟻の XYZ 暑さかな

♥ 2 蟻の道 XY より続きけり

♥ 3 生きて世に XYZ

解答例

♥ 1 大蟻の石垣のぼる暑さかな 天涯

大蟻の張板登る暑さかな	白峰
大蟻の銀杏に登る暑さかな	紫牛
大蟻の枯木に登る暑さかな	楽山
大蟻の庭木に登る暑さかな	寒江
大蟻の脛這ひ登る暑さかな	千岳
大蟻の白塔よづる暑さかな	芙蓉
大蟻の覚悟あらわる暑さかな	透舟

元句は下記。これが一番すぐれて普遍性を持つ。理由は不言とす。

大蟻の畳をありく暑さかな 士郎

元句に類似した句も出現した、

大蟻の座敷に上る暑さかな 正雄／無楽
／今更

大蟻の畳に登る暑さかな 機明

- ♥ 2 蟻の道縁の下より続きけり 林一太郎
蟻の道垣の隙より続きけり 仁東生
蟻の道隣り村より続きけり 百谷王
蟻の道地蔵の腹より続きけり 行々子
蟻の道先の先より続きけり 鬼門堂
蟻の道暑き空より続きけり 松月
蟻の道雲の峰より続きけり 一茶

- ♥ 3 生きて世に貧の寒燈ともしけり 濱人
生きて世に明け暮れ淋し老の秋 時綱
生きて世に病の床の桜かな 昌東
生きて世に真田が庭の桜かな 牧人
死を覚悟して志度山（しどさん）の麓
に隠棲していた真田幸村
同じく人の死に直面しつつ自分の死をみつめる句。「生きて」が最大限の効果を発揮する。
生きて世に人の年忌や初茄子（なすび）
凡菫

虚子は、良い句を作るには、古い句を読み新しい句を作れ（[高浜虚子2009] p. 90）と言っている。これが句作における美意識高揚に有用ということであろう。情報論的形式性の観点からは、俳句における普遍性（不易）と新奇性（流行）そして、陳腐と珍奇の陥穽からの離脱こそが、句作における美意識であると言えよう。

埋字は所与の俳句の汎化であると言ったが、汎化、つまり変数化により俳句の普遍性や美質に一步接近できると考えている。変数Xをどのように具体化

(instantiation) したならば、より普遍的になるか／より美的になるか、そして、どのような具体化は陳腐を結果するか、と考察することにより不易流行の真

髓、つまり俳句の真の美質に接近できる。

汎化変数X、Y、Zを、今少しカテゴリカルな分類変数にすることは次の課題である。

7. おわりに

俳句の前身は連句の先頭を束ねていた発句であることを確かめつつ、格調つまり完結性と独自性を確保する装置としての切れ字について議論した。次に切れ字の実体（肉体）が消滅し、機能（精神）だけが抽象化されて残存した装置としての「切れ」を論じた。切れは、もはや統語的にのみ作用するのではなく意味的にも作用する。つまり「切れ」は、俳句における「語り」の流れを中断あるいは切断する機能（函数）である。切れの函数的性質の故に、汎化変数としての「埋め字」を自然に導入することが可能となる。

切れ字、切れ、そして埋め字などの装置を使って、俳句の持つ美質、そして句作者の美意識に接近する努力をし、その結果得られた知見の断片を報告した。

結局、良い俳句、美しい俳句を詠むための王道は、高浜虚子の説くようにすぐれた古典俳句を多く読み、新しい俳句を作る努力をすることに尽きるのかもしれない。

参考文献

- [1] 仁平勝(2009), 五七五という装置, in: 片山由美子, 他(編)俳句の詩学・美学, 俳句教養講座 第二巻, 角川学芸出版(2009) pp. 10-24
[2] 川本皓嗣(2009), 切字の詩学, ibid. pp. 25-37
[3] 蘆川桂洲(あしかわ けいしゅう)(1687), 『食用簡便』, 九州大学附属図書館(貴重書コレクション)所蔵
[4] 鈴木真理子(2000), 『遠花火』, 有限会社トーカイ
[5] 鈴木真理子(2008), 『渡る橋』, 有限会社トーカイ
[6] 大道寺将司(2012), 『棺一基』, 太田出版
[7] 大道寺将司(2015), 『残(のこん)の月』, 太田出版
[8] 新田義彦(2012) 「俳句の意味の形式的解釈の試み」(“An Essay on a Formal Interpretation of HAIKU”), 電子通信情報学会・2012年3月総合大会 於 岡山大学, 『A-13-5 思考と言語

セッション論文集』

- [9]新田義彦(2013) 「不言の美文 ——俳句における省略の機序」(“Silence of Beautiful Sentences---The Mechanism of Omission in HAIKU”), 電子情報通信学会技報 112(442)
- [10]新田義彦(2018),「オントロジー空間を漂泊する俳句」, 第57回ことば工学研究会(2018-2-23) in 人工知能学会, 於 千葉大学 人文社会学系総合研究棟 2F グラジュエイト・ラウンジ1
- [11]新田義彦(2013) 「不言の美文 ——俳句における省略の機序」(“Silence of Beautiful Sentences---The Mechanism of Omission in Haiku”), 電子情報通信学会技報 112(442)
- [12]新田義彦(2018),「オントロジー空間を漂泊する俳句」, 第57回ことば工学研究会(2018-2-23) In 人工知能学会, 於 千葉大学 人文社会学系総合研究棟 2F グラジュエイト・ラウンジ1
- [13]藤沢周平 (1999-3) 『藤沢周平句集』, 文芸春秋.
- [14]堀切実(1988) 『表現としての俳諧』, ペリかん社
- [15]水原秋櫻子 (2005), 『新装版 俳句小歳時記』, 大泉書店
- [16]山本健吉 (1958-6), 『近代俳句』岩波講座 日本文学史, 第11巻 近代, 岩波書店
- [17]山本健吉 (訳) (1977-1), 『芭蕉名句集』日本古典文庫17, 河出書房新社
- [18]Nitta, Y. (2012c). An approach to linguistic aesthetics by functional grammar. In *The Proceedings of the 22nd Biennial Congress of the International Association of Empirical AESTHETICS (IAEA) 2012 Aug* (pp. 22-25). Rome, Italy: University of Rome Tre.
- [19]Nitta, Y. (2012d). Aesthetic sentence generation by functional grammar. *Economic Review of Nihon University*. 82(3) .9-17.
- [20]Nitta, Y. (2013), Silence of beautiful sentences - The mechanism of omission in HAIKU. In *Proceedings of the IEICE Conference on Study of Thought and Language. Meiji University., International General Research Laboratory* (Vol.114, No.442, pp. 73-78). Tokyo, Japan: The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers.
- [21]Nitta, Y. (2015). On the formal generation of Haiku. In *Technical Report of IEICE (2015-3)* (Vol.114, No. 465, pp. 23-26). Tokyo, Japan: The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers.
- [22]Nitta, Y. (2017) Haiku-like Aesthetic Sentence Composition through the Narrative Process, In: *Content generation through narrative communication and simulation* (ed: T.Ogata) IGI Pub. USA.
- [23]Saraki, M., & Nitta, Y. (2005). The semantic classification of verb conjunction in the “Shite” Form. *Proceedings of Spring IECEI Conference* (A-13-3). Tokyo: The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers.
- [24]Saraki, M. (Ed.) & Nitta, Y. (2008). *Seiki-Hyougen-to Text Mining (正規表現とテキスト・マイニング) [Regular expression and text mining]* (Second Printing). Tokyo, Japan: Akashi-shoten.
- [25]Yamane, T. (山根 公) (1996). *Chiyo-Jo's haiku seasons* (Y. Ishibashi & P. Donegan Trans.). Matto City Publishing. (Original Published, Yamane, T. (n.d.). *Chiyo-jo no toki no uta* (『千代女の季の句 (ときのうた)』). Ishikawa, Japan: Kitaguni-Shuppan-Kyoku).